

ただの先輩後輩じゃなく

とらきちじろう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エアグルーヴとメジロドーベル、先輩後輩の2人がイチャイチャしたりバチバチしたりするだけ。

少しでも2人の魅力を広めたい。pixivにあげてるものを大体そのまま持つてくる予定です。

# 目次

大阪杯のあとに・その背中を越える日ま	1
で	1
アタシもいつか、ヒロインに	7



# 大阪杯のあとに・その背中を越える日まで

大阪杯が終わった。結果は、エアグルーヴ先輩が1着、アタシが3/4バ身差で2着。宿舎に戻って1人、今日のレースを思い返す。

最終コーナーまで、先輩のすぐ後ろについて、直線で横に並んだ時、もしかしたら勝てるかもしれないと、思った。でも、全力で走っても背中はずっと離れて、届かなくて。その光景が、悔しさが、レースが終わってからもずっと離れない。

悔しい、悔しい。自然と目には涙が溜まっていて、気を抜くと大声を上げてしまいうだった。……本当は、今のアタシじゃ勝てないって、走る前から分かってたのに。

「だって……先輩は……」

どんな時だって、エアグルーヴ先輩は輝いている。

アタシが男性教官とのトレーニングで上手くいかなくて、悩んでいたところに声をかけてもらったのが、始まり。そして、先輩は自信がなかったアタシに理想を示してくれた。あの日から、アタシはずっと先輩の背中を追っている。いつか追い越せる日を夢見て、努力を重ねてきた。

けれど、同じレースで走るようになって、力の差を見せつけられた。敵わないって何

度も思い知らされた。

でも、アタシが諦めたいつて思った時、手を伸ばしてくれたのも、見捨てないでくれたのも先輩だった。レースの世界では、アタシたちは敵同士なのに。前と変わらずトレーニングを一緒にしてくれて、いつも気にかけてくれて、ずっと背中を追わせてくれる、アタシの理想。

負けるのは悔しいけど、先輩が1着になることは嬉しい自分もいて。でも、やっぱりとてつもなく悔しくて。貴方を追い越したい気持ちは、どんどん強くなっていく。

「次は、絶対……！負け……！……っ！」  
小さく叫んだ。

——先輩が「私を追いかけてみる」と理想を示してくれた日のことを、今でも覚えている。先輩は、自分の理想をこんな風に語っていた。

道を見失いそうになった時。  
膝をつきかけた時。

かの理想が、私を導く。

「『ここまで来い』って」

何度も思い出して、繰り返した独り言。そして、脳裏に焼き付いた背中を、また追

かける。

「努力するだけ。あの人よりも」

目を閉じて想像するのは、追い越した先に見える景色。

大阪杯が終わって、2人での定期トレーニングの日。いつも通り、先輩の後ろについてコースを周回する。今日は、これまで以上にフォームを観察し、息遣いに耳を澄ませる——勝つ方法を考えていた。

数日経っても悔しきは消えない。あの光景を思い出すと涙が溢れそうになる。でもそれ以上に、胸から熱いものが湧き上がるのを感じている。

ふと先輩が、尻尾を大きく揺らして振り向いた。休憩の合図だ。

「レースからそこまで日は空いていないが……疲れは取れているようだな。いいペースで付いてきた」

「あ、ありがとうございます……!」

いつもと同じ距離だが、集中していたからかあつという間だった。もつと走りたい。この後のトレーニングはどうしよう。先輩に勝つには、もつともつと努力しないと——

「ドーベル?何か険しい顔をしているが……大丈夫か?」

「……!?は、はい!大丈夫です」

考え事をしていたせいで、返事の声が上がってしまふ。先輩は私の顔を覗き込んで、僅かに口角を上げた。

「この間のレースで自信を失っている、という訳ではなさそうだな。むしろその逆か」

「え……逆、つて？」

「気付いていないのか？確かに感じるぞ。お前の闘争心を、絶対に負けないという強い意志をな」

「……………ご、ごめんなさい！アタシ、そんなに顔に出てましたか!？」

思わず頬に手を当てる。自分の心の内が見透かされていて、顔が一瞬で熱くなった。先輩はそんな私の様子を見て嬉しそうに笑う。

「なに、謝る必要はない。嬉しいことだ。お前が私を超えたいと思っていること、そして、その思いが隠しきれないほど大きいことはな」

「……………!!違つ、そんなつもりは……!な、なくはないですけど、えつと……」

なぜだか、先輩にはこの気持ちを知られたくなかった。先輩が理想で、超えたいと伝えてはいたけれど、そんな言われ方をするとなんだか自分が重いみたいだ。

「まあ、やる気があるのは良い事だ。だが、次のレースもまだ決まっていけないんだ。あまり気合を入れすぎて、途中で燃え尽きないようにな」

「……………ありがとうございます。でも先輩、心配しないでください。先輩への熱が収まる

ことは絶対ないですから。先輩と出逢ってからずっと、憧れも、好きって気持ちも、超えたい思いもずっと消えなくて。きつと、燃え尽きるどころかもつともつと熱くなつて……」

言いながら、先輩が気まずそうに目を逸らし、頬を赤らめたのを見て、気が付いた。もしかしてアタシ、とんでもなく恥ずかしいことを口にした?!?!

「あつ……先輩！その、今のは例えというか、えつと、先輩のこと大好きなのはもちろん嘘じゃないんですけど、そういう意味じゃないというか……!!!」

……どんどん墓穴を掘っている気がする。

先輩は顔を真っ赤にして、耳はへなへなと下に垂れていた。そんな様子を見たことがなかったから、なんだか可愛いと思ってしまったけれど、だからと言ってこんな雰囲気が続くのは耐えられない。

「へ、変な空気にしちゃつて、ごめんなさい！トレーニングに、戻りましょう！」  
「……そうだな」

後ろを向いて、すっかり熱くなった顔を仰ぐ。4月の風はまだ涼しく、火照りを冷ますのにちょうど良かった。

「……ドーベル」

「……！なんですか？」

「振り向かなくていい。その……私だけ言われてばかりでは嫌だからな」

やけに固い先輩の声。言葉通り、背中を向けたまま聞いていた。

「私にとつても、お前は大切な存在だ。お前の私への思いと同じくらい、私もお前を意識している。だから……そのまま上がってこい。そして、必ず私を追い越してみせろ」

余りにも、不意打ちすぎる。

「……以上だ。次のトレーニングに行くぞ」

急いで振り向いて、走り出した背中を追う。早くなる心臓の鼓動。

ほら、やっぱり。この熱は冷めることを知らない。

## アタシもいつか、ヒロインに

エアグルーヴ先輩とのトレーニングの日。今日は空き教室で勉強をして、賢さを上げるのがメインだ。

隣同士の席に座り、別々の本を読む。時々先輩に質問して、休憩がてら他愛無い話をして。一人で勉強するよりずっと、アタシはこの時間が好きだ。何より、先輩と2人でいられる時間だから、好きなのもかもしれない。

トレーニング開始から1時間ほど経った頃。突然、教室の後ろのドアが開き、1人のウマ娘が飛び込んできた。かなり急いで来たのか、息を切らしている様子だ。

「エアグルーヴ先輩！トレーニング中すみません……！少しいいでしょうか？」  
「ん……？どうした。今行く」

あの娘は……確か生徒会に所属しているウマ娘だ。先輩は呼びかけに頷き席を立つと、アタシに振り向いて、申し訳なきように頭を下げた。「気にしないでください」と、首を左右に振って答える。

ドアが閉められ、すりガラスからは2人の影だけが透けていた。誰かに頼られている先輩を見るのは好きだけど、ちょっとだけ、モヤモヤする。

気持ちや誤魔化すように本に目を落としてはいても、意識はほとんど耳に向いていた。廊下で話す声ははつきりと聞こえないが、声色を聞く限りあまり楽しい内容ではなさそうだ。

話が終わり、再びドアが開く。眉間に皺を寄せて、頭を抱えた先輩の姿。嫌な予感があった。

「ドーベル、すまない。少し急いで確認しなければならぬ用ができた。すぐに戻るが、その間自習をしてもらってもいいだろうか？」

「……はい、分かりました！」

廊下を歩く2人の足音が遠くなって、消えた。静かになった教室では、時計の針の音さえもやけに大きく聞こえてくる。先輩に言われたように、1人でもちゃんと勉強しようとは本を開いてはいるけれど、内容はちつとも頭に入らなかった。

「ふわぁ……」

窓から差し込む日の光が、自然と眠気を誘う。何度か欠伸を噛み殺したが、次第に首が前に倒れていく。ダメだと言いつき聞かせるように、首を横に振って、この睡眠に抗おうとしたけど……アタシは気付かないうちに、眠りに落ちていた。

◇

とても幸せな夢を見ている。簡単に言えば、エアグルーヴ先輩にももの凄く褒められる

夢だ。夢なのに意識はやけにはつきりしていて、腕の下にある机の感覚もまだ感じられた。

優しく、大好きな先輩の声がすぐそばで聞こえる。

「髪が綺麗だ」とか、「笑顔が可愛い」とか……「ずっと一緒にいたい」とか。普段だったら恥ずかしくて聞いていられないような言葉も、夢の中のアタシはフワフワした気持ちで聞いていた。

段々と、意識が深いところに落ちて、声が遠ざかる。胸の中は幸せな気持ちに包まれていた。

◇

固い机の感触。頭の下に敷いた腕が痺れている。目を開けると、開いたままの本と、その向こうにうつすらと先輩の姿。

アタシ、寝ちやつてた……!? 一気に心臓が早鐘を打つ。飛び起きて、謝罪の言葉が一番に飛び出た。

「せんぱいっ！ごめんなき——」

隣の席の先輩を見て、その言葉は途切れる。先輩は、机の上で穏やかな寝息を立てていた。

「寝て、る……?」

安心して、肩の力が無意識に抜けてしまった。けど、安心してる場合じゃない。先に寝落ちてしまったのはアタシの方だ。申し訳なきを感じつつ、先輩の顔を覗き込む。本当はすぐにでも起こして、トレーニングを再開しなきゃんだけど……。

「……寝顔も、綺麗だな。先輩」

アタシは、その姿に見惚れてしまっていた。

眠っていても変わらない凛とした顔つき。顔にかかる髪は滑らかで、耳の毛並みも美しい。白く透明な肌も、そこに映える真っ赤なアイシャドウも。

——本当に、綺麗だ。自分の醜さが嫌になってしまいうくらいに。

綺麗なのは容姿だけじゃない。いつでも気高く、誰より努力する心の在り方。多くの人に信頼されて、レースでも結果を残す、その貫禄。エアグルーヴ先輩の素敵など。なんて数えたらキリがない。

それに比べて、アタシは顔も性格も、嫌いなどころばかりだ。

……特に、最近のアタシは、何かヘンだ。

先輩と他の誰かが一緒にいると、誇らしいのに、なぜか目を逸らしたくなって……嫌な気持ち、心の奥に溜まっていく。アタシに見せない表情を見せる他の娘に、友人にまで嫉妬してしまう。

スズカと走っている時の先輩は、どんな時より真剣で。

タイキと話す先輩は、呆れながらも、いつもより楽しそうで。

ルドルフ会長という時の先輩は、尊敬と敬愛の思いで溢れていて。

そんな子供じみた嫉妬は、結局、自己嫌悪の裏返しだということも分かっている。

——スズカみたいな圧倒的な速さがあったら、先輩のライバルになれるのに。

——タイキみたいな明るさがあったら、もつとたくさん先輩と話せるのに。

——會長みたいな威厳と実力があつたら、先輩の心を、アタシに向けられるのに。

本当に、自分が嫌になる。こんなことを考えてしまうところも、変われないところも。

ふと、さつき見ていた夢を思い出して、呆れて笑ってしまった。夢の中の自分の方が、

よっぽど素直だ。本当は先輩にたくさん褒めてもらいたいし、先輩の大事な存在になり

たいと思ってるのに。実際のアタシは……そんなこと言える訳なくて。

この気持ちの正体、分かっているんだ。少女漫画のヒロインと同じ。その人のことを考  
えるとドキドキして、他の誰かと一緒にいると苦しくて……独り占めしたくなる。この  
気持ちの名前は。

「アタシ、やっぱり先輩のことが好——」

抑えきれない思いが口から溢れたちようどその時、先輩の耳がピクツと動いて、目蓋  
がゆっくりと開いた。深く蒼い瞳が、私を捉える。

「え………せんば、い………いつから、起きて………」

「ん…………っ！すまない、ドーベル…………!!私としたことが、居眠りをしてしまうなどんだ失態を…………！」

勢いよく起きた先輩の謝罪が、驚きと恥ずかしさで固まっていたアタシの言葉を遮った。

「…………ドーベル、どうした？顔が赤いぞ」

「いや、な、なんでもありません！」

びつくりしすぎて、心臓が飛び出そうだ。アタシの、さっきの…………告白、聞こえてないよね…………？

「む…………もしかして、私は寝ている間に何か変なことを口走っていたか…………!？」

「…………え？ふふっ。それは全然、大丈夫です！」

まだ少し眠そうな先輩の声。そして、心配事が余りにも普段の雰囲気とかけ離れていたから、思わず笑ってしまった。

「しかし、本当に面目ない。先に起きていたのなら起こしてくれて良かったのだが」

「も、元はと言えばアタシが先に寝ちゃったので、先輩が気にする必要はないです…………先輩こそ、戻ってきた時にどうして起こさなかったんですか？」

「いや、その…………」

先輩は急に歯切れ悪く、目を逸らす。

「お前の寝顔が……とても可愛らしかったから、しばらく眺めていたのだ。それに、ずいぶん気持ちよさそうに寝ているから、つられて眠くなってしまったというか……」

「……!!」

予想外の返答に頭がパンクしそうだ。先輩がアタシの寝顔を見てたこととか、つられて寝てしまったこととか。恥ずかしいし、信じられないし、可愛いし。

「いや、言い訳をするのは良くないな。私の意識が足りなかった。すまない」

「こ、こちらこそ、ごめんなさい。せつかくのトレーニングの時間を無駄にしちゃって。

……あ、あとー！」

「ん、どうした?」

「その……先輩。起きる前にアタシが言ってたこと、聞こえてないですよね……?」

一番の不安を問いかけると、先輩は不敵な笑みを浮かべた。

「どうした?何か私に面と向かって話せないことでも呟いていたのか?」

「……え!?ああつ、えつと、違つ……!き、気にしないでください!!」

完全に聞かない方が良かった。寝起きの頭で、色んなことが起こりすぎて、正常な思考ができなくなっている。首をブンブンと振るが、先輩の強気な表情は崩れない。

「ふつ、冗談だ。詳しいことは聞かないでやろう」

そう言うと、先輩は立ち上がり、私の頭を軽く撫でる。温かく優しい手。嬉しくて自

然と笑みが溢れてしまう。

「だが、そういう風に聞くということは」

ふと、手の動きが止まる。見上げた表情はどこか不安げだった。

「私が、その……お前が寝ている間に呟いていたことも……聞こえていないだろうか？」

「……ええ？」

「いや、聞いていないならそれでいい。……気分転換に、食堂に甘いものでも食べに行くか？」

「……はい！あ、でも……」

「む。ドーベルはトレーナーに甘いものを控えるよう言われているのだったか」

マックイーンと同じく甘い物に目がないアタシは、食べすぎないようにトレーナーに厳しく言われている。でも、最近は頑張つて我慢してるし、せっかくのお誘いなのだから、食べたいというのが本音だ。

「アタシは、食べたいです！その……トレーナーには怒られるかもしれないですけど……」

「勉強というの思っている以上に体力を使うものだ。それほど心配する必要はない。もし何か言われたら、私も一緒に謝ろう」

「えっ！そ、それはさすがに、申し訳ないというか……」

「ふむ、そうか。それなら……2人で半分ずつ食べるというのはどうだ？」  
「あ………！それ、いいと思います！」

教室を出て、先輩の少し後ろをついていく。後ろ姿を眺めながら、さつき先輩が言っていたことを思い出していた。アタシが寝てる時、先輩……何か言ってたのかな。

寝ている間に何かあったかといえ……そう、夢を見てたんだ。それは、先輩に褒められる、とても素敵で、鮮明な夢で――。

「……え」

もし、もしあの夢がアタシの妄想じゃなくて、先輩が、本当に言っていたことだったら。綺麗とか、可愛いとか……一緒にいたいとか、本当に先輩が思ってくれていたら。

「ど、どうしよう……」

自分でも聞こえないくらい小さな声で呟いた。

鼓動と呼吸が速くなる。顔が熱い。

もちろん、現実だ、なんて本気で信じてはいないけど、恋する乙女が勘違いして、希望を持つには十分だった。

アタシは他の娘みたいにはなれない。けど、やっぱりアタシなりに、まだこの恋を諦めたくない。

あの幸せな夢が、夢じゃありませんようにと願った。いつか大好きな先輩の手を握れ

る日を、少女漫画のヒロインのように夢見ている。